

岩田正美・西澤晃彦編著

『貧困と社会的排除——福祉社会を蝕むもの』

(ミネルヴァ書房, 2005年)

垣田裕介

I

本書は、タイトルに掲げられた「貧困と社会的排除」について、多分野の執筆者によって実に多面的なアプローチが試みられた一冊である。本書に示された研究の成果や手法は、広く福祉の研究・実践に携わる者にとって幅広い示唆を引き出しうる材料であるといえる。

ところで本書は、「講座・福祉社会」シリーズ(全12巻)の第9巻として刊行された。本書を手にして評者がまず目を通したのは、編著者の一人である岩田正美氏によって書かれた「あとがき」である。そこで紹介されているエピソードを読んだとき、本書に対する執筆者たちの意気込みを感じずにはいられなかった。本書執筆者による打ち合わせの場で、次のような発言があったという。すなわち、これまで日本で周縁におかれてきた貧困や排除の諸現象、またその研究について、本シリーズの「一種のアリバイ証明として、一括して押し込んだようなものであるならば困る」と。本書の執筆者たちは「そのような気概で、21世紀福祉社会の議論の『真ん中』にある課題として、貧困や社会的排除を議論した」という(313頁)。

以上のようなエピソードを伴った本書について、まずは全体の構成をみていただく必要がある。以下の通り、本書は序章を含めて、つごう13章から構成されている。各章のテーマや内容を眺め渡せるように、ここでは煩雑さを厭わずに、各章の副題も併せて記すことにする。

序章 貧困・社会的排除と福祉社会(岩田正美)

第I部 現代の貧困をみる視点

第1章 政策と貧困——戦後日本における福祉カテゴリとしての貧困とその意味(岩田正美)

第2章 排除による貧困——東京の都市下層(西澤晃

彦)

第II部 貧困の分布と諸相

第3章 収入からみた貧困の分布とダイナミックス——パネル調査にみる貧困変動(濱本知寿香)

第4章 住宅からみた高齢女性の貧困——「持ち家」中心の福祉社会と女性のハウジング・ヒストリー(泉原美佐)

第5章 健康と貧困との相互関係——健康と社会・経済的な状況(早坂裕子)

第6章 大都市における貧困の空間分布——1975～2000年のセグリゲーションの様態(山口恵子)

第III部 貧困と政策展開

第7章 「被保護層」としての貧困——「被保護層」は貧困一般を代表するか?(岩田正美)

第8章 福祉政策と女性の貧困——ホームレス状態の貧困に対する施設保護(川原恵子)

第9章 単身男性の貧困と排除——野宿者と福祉行政の関係に着目して(北川由紀彦)

第10章 外国人労働者をめぐる貧困と排除——就労・居住・消費の局面で(山本薫子)

第IV部 福祉社会への模索

第11章 檻のない牢獄——野宿者の社会的世界(西澤晃彦)

第12章 貧困地区の改善戦略について——島団地再生事業の経験から(平山洋介)

さて、あらかじめ本稿の叙述形式について断っておきたい。書評の叙述形式は多くの場合、内容が一括して要約されたうえで諸論点についてのコメントがなされるという順序が採られる。しかし本稿ではあえて、章ごとに概要とコメントを記し(Ⅱ)、最後に本書の全体に対するコメントを記す(Ⅲ)。というのは、評

者にとってはその形式ないし順序の方が、多様な議論が収められた本書の内容紹介とコメントの作業を進めやすいと考えられたためである。

II

それでは以下、各章について概要とコメントを記す。冒頭にも述べたように、本書には日本の貧困・社会的排除研究にとっての材料や糸口が豊富に示されているので、できるだけ立ち入って紹介しておきたい。

まず序章の岩田論文では、貧困に対する多様な見方や接近方法が整理され、それらに根ざす規範や価値判断に着目される。端的な例として「美と貧困」が挙げられ、両者ともに多様な見方があるが、貧困については社会にとって「解決すべきもの」や「除去すべきもの」という価値判断を伴って考えられてきたという。評者にとっては分かりやすい例えであったとともに、貧困に関する研究や実践においてあらためて検討・確認すべき論点であると考えられる。

また本章では、ポスト工業化社会における社会的排除論の意義についても手際よく整理されており、近年になって耳目を集め始めた社会的排除概念に対する読者の関心をいっそう引き付けるであろう。さらに、国民や地域住民の福祉供給における「主体と責任」についても言及される。「貧困や排除によってその『主体と責任』を全うできない状況におかれている人びとがどのくらいいるのか」という論点が、『福祉社会』シリーズの根幹におかれるべき議論」の出発点に位置づけられる箇所(8-9頁)は、特に本書第IV部との関わりにおいても興味深い。

次に、二つの章からなる第I部は、現代日本の貧困を検討する視点が論じられており、評者にとって読み応えのあった部分である。本書は論文集であるため、どこから読むか、どれを読むかという選択は、相当に読者の関心に委ねられる。しかしながら評者としては、本書を読まれる方にはぜひ(先の序章と)第I部から繙かれることを勧めたい。なぜなら、ここで示される視点は本書の基調に位置づけられるとともに、本書各章と有機的に関わっていると考えられるためである。なかでも第1章は、福祉政策における貧困認識のありようが検討された好論文である。

その第1章の岩田論文で焦点が当てられるのは、「戦後の『福祉』系列の諸政策が、どのような貧困認識を示し、どのようなカテゴリーでそれを把握したの

か」(16頁)という点である。福祉政策の対象として指定されるカテゴリーとの関わりで貧困認識や貧困対策の系譜が描かれ、政策カテゴリーにおける「一般」と「特殊」という類型を用いて検討される。具体的には、貧困の「一般救済」策としての生活保護制度によって形成された貧困一般カテゴリーとしての被保護層と、それとは別のカテゴリーとみなされてきた稼働年齢男性や「要保護女子」等への特殊貧困対策の経緯や特質が描かれている。戦後日本における貧困対策の展開過程において貧困の諸カテゴリーがどのようなポジションに付置されてきたか、この論点の検討は第III部においてさらに深められることになる。

第2章の西澤論文では、戦前・戦後における東京の都市下層に対する排除の様式について、「治療」・「隠蔽」・「抹殺」という三つの類型を用いて検討される。なかでも主眼がおかれるのは、『『よき国民』を仕立て上げる操作』としての「治療」と、「治療に値しない非国民的な存在を」「社会的・空間的に隔離し」「不可視化」するものとしての「隠蔽」である(47頁)。「治療」の対象とされた女性や子ども、高齢者、病人、そして隔離・監視され「隠蔽」された「乞食」や「浮浪者」または「娼妓」、このようなカテゴリーや対応方法が埋め込まれた戦後福祉制度によって、人が腑分けされ都市下層が排除されてきたという。

権力あるいは制度における対象カテゴリーの指定と、カテゴリー別の対応の手法・様態にみられる特徴が分析されるという観点は、先にみた第1章とも通底している。ところが評者は、本章で「治療」や「隠蔽」などの概念が用いられることに違和感を抱いた。それは、本章に登場するフーコーやドゥルーズなどによる議論について、評者が不案内だからかもしれない。しかしながら、レトリックを駆使した事象の解釈・記述という手法については、そこで用いられる概念や導き出される解釈の妥当性を検証することが困難であるように思われる。とはいえ他方で、経験的・具体的な事象がそのように解釈・記述されることによって、事象のダイナミズムや特質を描きうるといえるのかもしれない。先取りしていえば、同じ執筆者による第11章に対しても同様の感想を抱いた。すなわち、違和感を覚えつつも興味深く読まれたという点で同様であった。

さて、続く第II部では、様々な手法による実証研究が四つの章にわたって収録されている。

第3章の濱本論文では、収入からみた貧困について、その分布や変動の把握が試みられている。この、いわば貧困の動態的把握の方法として、パネル調査が用いられている。パネル調査においては、同一個人を対象として継続的に追跡することにより、調査項目について時系列での把握がなされる。このような調査方法は日本ではまだ馴染みが薄く、こうして研究成果が公表されることは貴重である。

具体的には、若年女性世帯の貧困経験が類型化され、類型別の特徴が析出されている。また、動態把握の手法を用いることによって明らかにされた貧困実態が丁寧に分析されている。結婚や離婚、子どもの養育などといったライフイベントとの関わりについては、まさに執筆者のいうように、ラウントリーの指摘が今日の日本にも通用する点であろう。そして本章で結論的に導き出された分析結果は次の通りである。「近年の貧困世帯の増加は、単に数の増加にとどまらず、慢性的な貧困を増加させ、貧困が深刻化している」(91頁)。貧困への転落要因や脱出契機については今後の課題とされているが、貧困の動態把握の方法と有用性が示されている点で意義深い成果だと評価することができる。

第4章の泉原論文では、「ハウジング・ヒストリー」という手法によって、住宅からみた高齢女性の貧困が分析されている。28名の聞き取りデータを素材として、調査対象者が現在の住宅にたどり着いた経緯や、居住状況別の特徴が質的分析によって丁寧に描かれている。分析枠組みには戦後日本の住宅政策や企業福祉(社宅など)との関わりが盛り込まれており、それらの政策・制度のなかで「单身」、「女性」、「高齢」というカテゴリーが安定的で質の良い住宅を取得するうえで障害となる様相が具体的に示されている。

高齢女性の住宅の貧困が、労働市場や社会保障における女性の不利、すなわち低所得に結びついているという本章の分析結果は、今後の貧困研究において居住や住宅政策に目を向ける意義と意味について説得的に語っているともいえる。

第5章の早坂論文によって検討されるのは、貧困や低収入、失業などの社会経済的状況がどのように健康に影響を及ぼすかという論点である。日本を欧米や北欧の諸国と対比させつつ、各国の実態や先行研究、政府指針を対象とした分析がなされる。本章の特徴は、各国の並列的あるいは平板な比較ではなく、諸外国の

状況をふまえて日本の特徴が浮き彫りにされている点にあるといえる。そこで日本の問題点として主に着目されるのが、国民健康保険制度である。制度の概説から問題点の所在までが手際よく整理されたうえで、保険料・税の滞納者に対するペナルティ(短期被保険者証や資格証明証の発行)による健康状態への影響の実態把握がなされる必要性が提起される。また、近年よく用いられる「生活習慣病」という行政用語についても、国際的に珍しい用語であるだけでなく、健康を社会経済的状況との関連で捉える視点が欠落しているとして問題の所在が示される。

評者が思わず本章に引き込まれたのは、構成が整序されているだけでなく、日本の健康問題の様相と構図が描かれたうえで、執筆者の批判的見解が明快かつ力強く示されているためである。

第6章の山口論文もまた、今後の貧困研究における方法上の可能性を感じさせる。本章は、「みえにくい」とされる貧困を、地図化作業を通して可視化する試みだといってよいであろう。具体的には、失業率や生活保護率、「ホームレス」数などの指標を用いて、首都圏における貧困の空間分布とその変動が示される。政策や既存の諸資源との関わりにも目配りがなされたうえで結論的に見出されているのは、「貧困状態が強まると都市のより中心部への集中する傾向」すなわち「貧困の空間的集中化」である(165頁)。

本章に示された地図は力作として評価できよう。しかしながら、そこから導き出された類型にもとづく分析記述(第3節)は評者にとって読みづらい面もあった。とはいえ、地図を用いた貧困の可視化という本章の手法は、先述した貧困研究における方法上の可能性という点にとどまらず、次の意味においても評者に大きな関心を引き起こした。すなわち、国内や国外において貧困・社会的排除を分析対象とする地理学研究が盛んになりつつある様子をふまえれば、今後の貧困研究はさらに多領域にまたがった多角的なアプローチが期待できると考えられる。その意味でいえば、先にふれた本書「あとがき」で指摘されているような、社会福祉研究における貧困の周縁化はなおさら問題視される必要があるように思われる。

次に、第三部では、戦後日本の福祉政策による貧困の対象化と具体的プログラムの展開について、四つの章に渡って検討される。

まず第7章の岩田論文では、戦後の貧困の「一般救

済」策とされた生活保護制度に焦点を当て、「被保護層」が貧困一般をどこまで反映しているかという課題提起に即して実証的な検討が行われる。具体的には、生活保護統計と先行の調査研究のデータを用いて、世帯の類型・人員、ワーキング・プアへの対応、保護開始の理由といった三つの角度から検証される。そのうえで、生活保護の対象は「単身の高齢者や傷病者の貧困に収斂されていった」(184頁)とされる。さらに本章の後半においては、そのような特徴を有する被保護層が社会の中でどのような位置におかれ、どのような意味を持っているかについて検討される。非稼働層の中の特定層として固定化された被保護層について、社会保障一般の補足的対応としての意味が見出され、また保護の長期化や開始廃止の繰り返しといった特徴が指摘される。

生活保護制度が多様な貧困層に対して文字通りの「一般救済」策として運用されてこなかったこと、具体的に例えば本章にも記されているように、被保護層の非稼働世帯化についてはかねてから指摘されてきた。しかしながら、それでは多様な貧困層の中で被保護層がどのような位置にあり、それがどのような意味を有するのかという論点に正面から挑んだ本章はさすがに読み応えがある。課題の立て方、それを検証する力量は、日本を代表する貧困研究者といわれる本章執筆者の面目躍如であろう。なお付言すれば、本章における生活保護の統計分析は、生活保護統計についての基礎知識を習得する手引きとしても有用であろう。

第8章の川原論文では、東京におけるホームレス状態の女性への対策を事例として、女性の貧困に対する戦後福祉政策の経緯と特質が描かれる。東京における施策展開の箇所(第3節)は、やや冗長にも感じられるものの、複雑に錯綜する女性の貧困への対策が解きほぐされている。日本における野宿者の性別分布がなぜ偏っているのか、あるいは直接的にいえば、なぜ野宿者の中で女性の占める割合は格段に低いのか、この論点に迫る格好の論文として評価できる。また本章の冒頭(第1節)における社会福祉の対象に関する言及と、それをふまえて展開される本論を、社会福祉対象論として読み直すのも興味深いと思われる。

第9章の北川論文では、東京における男性野宿者に対する福祉行政や関連施策のありようをふまえて、彼らの貧困や排除をめぐる様相が描かれる。生活保護制度の運用や日雇労働市場のありように大きく影響を受

けて生成された「ホームレス」の男性が、まさに彼らをターゲットとする自立支援システムにおいてどのように対処あるいは選別・排除されてきたか。本章では関連する用語や施策について丁寧な解説がなされつつ、単身男性の貧困が生成される背景や「自立支援」の問題点が示される。なかでも自立支援システムについて検討された第3節は、システム利用の順に沿ってシステムによる選別・排除の様相や基準が描かれている点で、問題のありかをスムーズに把握することができた。なお、一点のみ誤記を指摘しておく。厚生労働省による2001年3月の通知の引用のうち、「居住地がないことや稼働能力がないことのみをもって保護の要件に欠けるものではない」(226頁3-4行)という箇所について、正確には「…稼働能力があること…」である。

第10章の山本論文では、ニューカマーと呼ばれる外国人労働者の貧困問題について、住居や社会保障の側面に加え、消費社会における外国人労働者という観点からの接近が試みられる。評者にとって、ニューカマーの消費行動に関する記述は新鮮であった。本章の冒頭では、執筆者が自ら参加していた外国人支援団体の事務所を訪れる外国人が、予想以上に「豊か」に見えたという経験が紹介される。さらに、「単純に収入だけに着目すれば、『外国人労働者イコール貧困』という図は成立しづらい」(245頁)と述べられる。そうして本章では、上記の図のような決め打ちを退けつつ、ニューカマーと貧困との関係について考察される。なかでも住居や医療をめぐる問題については実態や制度運用をふまえて具体的に示されており、教えられる点が多かった。

それでもやはり評者の印象に残ったのは、彼らの消費行動であり、また末尾で紹介されるバンコクのスラムの事例である。長期ローンを組んでまでテレビを購入し、そのテレビに映される商品をさらにローンを組んで購買を重ねていくという消費行動。貧困や貧困者の生活構造を考える際に、消費社会や消費行動のありようを無視できないことを本章によってさらに痛感させられるのは、おそらく評者だけではあるまい。

最後の第IV部は二つの章によって構成されており、貧困や社会的排除を克服し、福祉社会を模索する糸口について考察される。

第11章の西澤論文では、野宿者の生活世界が「檻のない牢獄」と表現され、排除と自己否定、そして死

を待つ空間が野宿者によってどのように生きられるかについて描かれる。「剥き出しの生」(アガンベン)とは区別される生をまさぐる野宿者、あるいは生の無力化に抗うように「自己の再構築」を模索する野宿者、そうした彼らの社会的世界が、彼ら自身による語りにもとづいて描き出される。

先に第2章の箇所で記したように、本章の執筆者によって用いられる概念とそれにもとづく事象解釈や記述は、容易には理解しがたい。しかしながら本章の主旨は明快である。評者は、特に「自己の再構築」の箇所(277-281頁)に引き込まれたうえに、せつなさというのか如何とも表現しがたい感情を覚えた。その点でいえば、本章のような事象解釈によって記述されるスタイルは効を奏しているのかもしれない。しかしながら一方で、例えば「剥き出しの生」という概念がわざわざ本章に持ち込まれる必要があったであろうかという素朴な疑問を拭えないのも、率直な感想である。

第12章の平山論文は、執筆者が長期に渡って関与した「不良住宅地区」の再生事業について、具体的なプロセスにもとづいて記述される。冒頭部分では次のように喝破される。「貧困地区の状態を計測し、その構造を理解しようとする認識論の範疇での分析は多くみられる。しかし、その改善戦略に関する議論は深まっていない」(286頁)。本書最終章としての本章において、まさに「貧困と社会的排除」からの出口をこじ開けようとする執筆者の気迫に、読者は圧倒されるであろう。

本章で取り上げられる和歌山県御坊市の島団地へは、評者も2002年夏に調査で訪れたことがある。本章の執筆者がいうように、評者も最初にそこを訪れたときには驚いた。「激しく老朽・劣化し」た住棟、「無秩序な増改築」(309頁)に目を奪われ、そして独特の空気が醸し出されていた。その再生事業の最大の特徴として本章で位置づけられるのが、ワークショップ方式である。住民・行政・専門家によって互いに話し合わせ、事業が進められてきたという。なかでも「誰が決めるのか?」と題された第3節に記された経験や「悩ましい場面」は興味深い。

本章を通じて発せられるメッセージは濃密で力強い。再生事業の成功事例が美談として記されているの

ではない。具体的な工夫や試み、入り組んだ葛藤などを記しつつ、「改善の方法論」の検討が提起されている。どのような「問題」について、どのような「手法」によって、どのような「解決」に導こうとするのか。この再生事業によって試みられたとされる「『改善する』行為の脱構築」(310頁)は、広く福祉に関わる実践にとっても理論研究にとっても、これまで自明視されてきたものを問い直す契機であるように思われる。

III

与えられた紙幅をすでに超過しているが、本書全体に対するコメントを簡潔に記しておきたい。すでに各章について示したような本書に対する積極的評価を前提として、物足りない点をいくつか限定的に列挙する。

第1に、本書が「実証研究をベースに」組み立てられた(313頁)とはいえ、やはり理論研究も収録していただきたかったという点である。具体的には、本書のタイトルに掲げられている「社会的排除」論についての本格的な検討、また日本における「貧困」論研究のこれまでの到達点や今日における限界や問題点の提示、さらにアマルティア・センによる研究成果への言及などが挙げられる。第2に、本書のように大都市の貧困が多く取り上げられると、どうしても地方都市や農山漁村における貧困について無意識でいられないのは評者ひとりではなからう。挙げればキリのない無責任な「ないものねだり」は、以上に留めておきたい。

最後に、本シリーズの刊行が予定・広告されて以来、本書の刊行を待ち望んでいた者として付け加えた。本書に収められた内容は当初の期待を大きく上回るものであった。論文集としての本書が総括部分を持たない点を不満とされる読者もおられるであろう。しかし、あえていうならば、それでもよいのではないか。「貧困と社会的排除」に対して多角的な視点、多様な方法によるアプローチが試みられた本書は実に刺激的である。多様であるからこそ間口が広く、幅広い方々に一読を勧めることのできる一冊である。

(かきた・ゆうすけ 大分大学講師)